

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：34411

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01638

研究課題名（和文）政治学との接合による規範的教育学の再構築

研究課題名（英文）The reconstruction of prescriptive educational theory by connecting it with political science

研究代表者

高宮 正貴（Takamiya, Masaki）

大阪体育大学・教育学部・准教授

研究者番号：20707145

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,400,000円

研究成果の概要（和文）：政治学や政治理論の議論と教育学を接続させることにより、政治学と架橋された規範的教育学の再構築を図った。

【1A】「教育の分配的正義」班は、文化的差異や家族の自由と教育の分配的正義がいかに衝突しうるかを明らかにした上で、教育及び教育機会を公正に分配するための方途を示した。【1B】「教育の生政治」班は、教室空間、遺伝子改良や重度障害児などの事例について、生政治と教育が結びつく様子を明らかにしつつ、生権力への抵抗可能性を探った。【2】「政治的人間形成」班は、様々な政治理論において人間形成がどのような位置を占めているのか、さらにはその理論からどのような形で相対的に自律しうるのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の学校教育や教育政策を批判的に考察するための「教育の生政治論」の構築、学校教育や教育政策を規範的に評価するための「教育の正義論」の構築、政治学の知見に基づくシティズンシップ教育論を教育学の観点から再検討したこと、以上の3点に本研究の学術的意義及び社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research project has attempted to reconstruct prescriptive theory of education.

[1A] Theories of distributive justice on education clarified how cultural diversity and familial liberty contradicted distributive justice in education and showed the way to distribute education and educational opportunity fairly. [1B] Theories of bio-politics in education clarified how bio-politics and education were connected in the cases of classroom, genetic improvement, and severely handicapped people, and explored the possibility of resistance against bio-power. [2] Theories of political human formation clarified how human formation was placed in diverse political theories and how it could be relatively autonomous from those theories.

研究分野：教育哲学

キーワード：教育哲学 政治理論 人間形成 正義 差異 生政治 抵抗 教育

## 1. 研究開始当初の背景

ポストモダニズムを通過した後、あるべき社会像を含んだ教育像をいかにして描き、現実の教育政策や実践を分析・批判・変革するための理論を提供することができるのかは、教育哲学において大きな課題となっている(下司晶(2016)『教育思想のポストモダン』)。しかし、あるべき社会像は教育学の中からは必ずしも出てこないため、政治学、特に現代民主主義論を参照して、あるべき社会と教育の像を同時に描く試みが、近年の教育哲学ではなされている。一方、政治学においても、シティズンシップとの関係から、市民の育成としての教育・学校の役割が問われるようになってきている(キムリッカ(2005)『現代政治理論』)。

近年提唱されている教育学と政治学の架橋としての「教育政治学」は、上記課題への応答の代表的な成果である(小玉重夫(2016)『教育政治学を拓く』)。教育政治学は2つの方向性として、

「政治が教育を規定する側面」(政治 教育:教育政策や教育委員会制度の分析が典型)と、「教育が政治を規定する側面」(教育 政治:学校等における市民性の形成が典型)を有する。教育政治学はこの両面から「教育の再政治化」を図ることで、<sup>1</sup>については、従来の教育行政学における「内外事項区分論」、つまり教育行政は施設の整備や財政措置等の教育の条件整備のみに関わるべきとし、教育の内容や方法については不問にしてきたことを批判する。その一方で、<sup>2</sup>については、戦後教育学のように教育の固有性(子どもの発達など)に依拠するのではなく、シティズンシップ教育という形で学校教育の中に政治を再吸収させることを試みる。

このように教育政治学は、教育政策を政治学の方法で分析しつつ、政治学者が望ましいと考える市民像に向けて資質・能力を教育するという両面作戦を取る。この試みは重要ではあるものの、政治学の方法や知見「を」教育学「に」応用する試みが中心となっているため、教育の観点からの検討が十全に行われているとは言いがたい。一方、政治学者の側からも、教育学から政治を見るとどうなるのかという問題提起がなされているが(田村哲樹(2018)『教育政治学』の射程)、それ以上の言及は行われていない。

こうした研究状況の中で、政治学と接続した規範的教育学を構築するには、以下の3点が求められる。まず、「政治 教育」では、【1A】なぜその政策や行政手続きが教育の観点から正当であると判断できるのか、【1B】政策や手続きが実行された場合に、どのような影響が日々の教育実践の場面で生じるのか、またその影響を教育という営みからどのように意味づけ・評価できるのか、を問わなければならない。また、「教育 政治」においては、【1B】で分析されたミクロな教育実践への影響を踏まえつつ、【2】単に政治「を」教えるという社会化の問題としてではなく、特定の政治的営みを可能にする人間形成の論理を当の政治理論の中に読み取り、社会化に尽きない<教育>の視点から解釈する必要がある。以上のように、本研究は、政治学と教育学を接合させるこれまでの試みが不十分であるという学術的背景を踏まえて開始された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、政治学と教育学を接合させる教育政治学の不備を補うべく、教育政治学とは異なった仕方で政治学と教育学を接続させることにある。具体的には、教育政策の正当性は何か(【1A】教育の分配的正義)教育政策はミクロな教育実践にどのように影響し、その影響をいかに評価しうるのか(【1B】教育の生政治)シティズンシップ教育における人間形成の論理はいかなるものか(【2】政治的人間形成)を探究することを通して、政治学と架橋された規範的教育学の再構築を行うことである。

## 3. 研究の方法

本研究の第1の方法は、教育政治学が 教育政策を政治学の方法で分析する、シティズンシップ教育を政治的社会化として捉えている、という2つの限界を超えて、単に政治学の方法・知見を教育学に応用するのではなく、それらを援用しつつも、<教育的なもの>に注目しながら規範的教育学の再構築を目指すことである。その際、3つの研究課題を設定した。

(1) 国家は教育制度をどのように統治して政策に反映させるべきか、その介入の正当性は何か。

(2) 教育が女性や性的マイノリティ、人種・民族的マイノリティ、障害者等を包摂するとともに排除する生政治の技法はどんなものか。

(3) 政治に含まれる教育の論理を提示する作業を通して、シティズンシップ教育とは異なった政治的主体の形成についての規範理論を教育学の側から提示すること。

本研究の第2の方法は、政治学と教育学を接続させる上記の3つの課題に取り組みつつ、その3つの研究成果を往還させ、相互の整合性を問うことである。

## 4. 研究成果

### 【1A】「教育の分配的正義」班

教育における分配的正義論は、誰が、誰に、どの範囲で、どのような教育を、どの程度分配すべきかを問う。しかし、既に教育哲学会第62回大会(2019年)のラウンドテーブルでは、教育においては「個人の取り分」の問題よりも、人々の間の「関係性」を問題にすべきではないか」という指摘がなされ、「平等な関係性(承認)か?公正な分配か?」という対立が明るみに出て

いた。「公正な分配」と言う場合、「何を」分配すべきかという「指標問題」と、どの程度まで分配すべきかという「水準問題」が問われる。そこで、教育哲学会第63回大会(2020年)のラウンドテーブル「教育における分配的正義論の可能性(2)」では、教育の「公正な分配」とはどのようなことを考察した。

(1) 教育における分配的正義論の「指標問題」と「水準問題」(高宮正貴)

E. アンダーソンの民主的平等論は、人格の平等な価値という民主的平等と、その民主的平等を実現するために必要なケイパビリティという財の両方を包括しており、「平等な関係性」と「公正な分配」の両方を包括する枠組を提示している。よりよい教育を受けた人が労働市場で有利になるなど、教育は「位置財」でもあるが、教育水準の不平等が直ちに不公正なわけではない。というのは、教育水準の不平等が同時に全員の利益になる限りで「公共財」として正当化されるからである。とはいえ、教育水準の不平等がつねに正当化されるわけではなく、アンダーソンは、高校のカリキュラムまでは全員が完了しなければならないとする「十分主義」を採る。

(2) 不運が支持する教育のグローバルな分配とは何か(橋本憲幸)

国際教育開発といういわゆる開発途上国の教育への関与のあり方を念頭に置き、教育はグローバルに分配されるべきか、どのようになされるべきかについて、運の平等主義、十分主義、平等主義を踏まえて検討した。運の平等主義は、現状が本人の意思の介在によってもたらされたかどうかで運を二種類に分ける。どこに生まれ落ちたかなどの自然的運と、本人はXできたのにしなかったという選択的運である。しかし、受け手の外部から贈られる教育は、その受け手にとって自然的運の一つである。とはいえ、教育の分配によって補われるべき不運とは何かはまだ明らかでない。十分主義や平等主義についても、教育の分配の場合には文化的差異という問題が立ちだかる。

(3) 何が教育機会を構成するのか(児島博紀)

調査報告『教育機会の平等』(1966年、以下『報告』と略す)及びその調査の主導者J.S. コールマンの教育機会の平等論を俎上に載せ、それらの教育機会概念の多義性やその構成要素の多様性を背景にある価値に着目して検討することで、「指標問題」について考察した。コールマンの教育機会の平等論は、教育機会を他の目的の手段として位置づける点(教育の手段的価値)、またインプット/アウトプット関係から教育機会を解釈する点(インプットの効率的変換)で、平等や権利などの理念よりも効率性のような経済学的な概念との結びつきが強い。それゆえコールマンの立場からは、「指標問題」はもっぱら教育による目的達成の効率性の問題として理解される。しかし、『報告』の記述には、コールマン自身とは異なる視点が見出せる。『報告』の政策的含意である人種的に統合された学校について、『報告』にはそれが寛容や相互尊重のような価値をもたらすこと(統合学校の政治的価値)を示唆する箇所がある。それゆえ、ここには分配される教育機会に関係論的な価値が含まれており、こうした価値を暗黙裡に「平等」に包含するのではなく明示化し教育機会の平等論に組み込むことは、分配か関係性かという二項対立とも異なる仕方で解答することにつながる。

本ラウンドテーブルでは、第1に、文化的差異と分配の平等の衝突という問題が明らかになった。第2に、学歴と収入の結びつきについては、教育格差の問題として広く知られることであるが、これは単に教育の問題ではなく、福祉によっては是正すべきと考えることもできる。これは指定討論者の生澤繁樹氏が指摘した「分配の社会性」(医療・介護・年金/中等教育/高等教育の優先順位)の問題である。

こうして2020年度のラウンドテーブルで、教育の分配的正義を考える際には、正義の原理や指標と差異の関係を検討することが不可避であることが明らかになった。国境を越えて一定の教育を分配するときには文化的差異の尊重と教育の分配が衝突しうるし、教育格差を是正しようとする、親が子どもを教育する自由と衝突しうる。そこで、教育哲学会第64回大会(2021年)ラウンドテーブル「教育における分配的正義論の可能性(3) 指標と差異」では、教育の分配的正義論はいかなる指標を採用すべきか、種々の差異にどう対処すべきか等を検討した。

(1) リベラリズムにおける機会の平等と家族(児島博紀)

家族が有する他の指標には還元できない独特の価値は何であるのか、また、それを踏まえて家族と機会の平等のような正義原理との対立はいかに論じられうるかについて、とくにH.ブリッグハウスとA.スウィフトの「家族の価値」論を取り上げて検討した。ブリッグハウスらは、家族内の親密な関係性が可能にする善を「家族関係財(善)」と呼ぶ。国家や政府の分配政策に関しては、家族関係財(善)を毀損する介入(読み聞かせの禁止など)が許容されないのに対し、それを毀損しない限りで大幅な介入(私立学校の規制など)が許容されることが論じられる。

(2) E. アンダーソンにおける教育の正義と差異(高宮正貴)

教育の分配的正義をめぐるブリッグハウスとスウィフト対アンダーソンの論争について考察し、アンダーソンの擁護を試みた。ブリッグハウスらは、ある個人の教育達成は才能と努力の関数であるべきで、社会階級的背景に影響されるべきではないという「教育の平等」の「メリトクラティックな構想」を提唱する。この構想を実現するには家族の廃止が要求されるだろうが、家族関係財の享受のため、ブリッグハウスらは家族の廃止を主張するわけではない。その代わりに、ブリッグハウスらは次の原理を提唱する。家族関係財を実現する他の選択肢が親に対して十分に与えられている限り、愛という動機に基づいて自分の子どもの利益を促進する親の自由が公

正な機会の平等を掘り崩すときには、親はその自由に対する請求権をもたない。しかし、アンダーソンからすれば、この主張は親の「善の構想に重荷を課す」。また、教育の平等のメリトクラティックな構想には、才能と努力のレベルをどの時点で測ったとしても、それに応じて教育機会を分配することは「早熟な人」に有利になる等の問題がある。

一方、アンダーソンは、すべての人が市民としての対等な地位を得るために、すべての人が高校のカリキュラムを完了すべきだとしつつ、それ以降の教育水準の不平等を許容するという「十分主義」を採る。ここには、人間の才能の発達は内在的な財だという考えと、才能の種類と水準の不平等が全員の利益になるように社会制度を設計すべきだという考えがある。この立場は、生まれつきの才能という「運」にとどまらず、どの家庭に生まれたかという「運」の影響を肯定することになるが、関係の平等主義に立つアンダーソンは、人種等の集団的な属性による教育水準の不平等は許容しない。

(3) 教育は民主主義に基づいて分配すべきか(橋本憲幸)

他者も差異も置き去りにした理論構成にならないためには、他者に配慮し差異を尊重する教育のグローバルな分配的正義はいかに可能かと問わなければならない。すると、専門家と名指される人びとを含め、分配の指標その他を意思決定できるのは誰/どこなのかを問わざるをえない。分配の正義については、各集団の自己決定を尊重すべきだという主張が民主主義の名のもとに語られることがある。ここで民主主義と専門知の関係または衝突が問題になる。民主的熟議や多数決で専門知がマジョリティから理解も支持もされずに99対1となったとしても、専門家の側が堅守しなければならない「1」があるのかもしれない。「教育的価値」や、教育の本質がその「1」かもしれない。なお、本質とは、望ましさではなく、どうしようもなさであり、たとえばパターンリズムという独善性の拭いきれなさが含まれる。

以上の2回のラウンドテーブル及び3年間の研究成果を踏まえて、今後の展望を示す。

(1) 政治哲学の議論や手法を教育に援用する場合、教育の特殊性や自律性をどう考えるべきか。教育を分配的正義論の対象とするとき、文化の多様性や差異という問題を無視し得ない。これには、A・センが述べるように「何が不正義か」という形で消極的な形での合意は得やすいのに対して、「何が正義か」については合意を得にくいことも関わっている。よって、「教育の正義」ではなく、「教育の不正義」を明らかにする方が考えられる。

(2) 公と私をどう捉えるべきか。リベラリズムを掲げるブリッグハウスらによる家族関係財の議論は、「国家=公」「家族と市場=私」というリベラリズムの従来前提を覆すものである。公と私を「領域」として空間的に分けるのではなく、「機能」の違いと捉える議論も可能である。

(3) 教育の分配的正義論を、教育格差や教育の公共性をめぐる教育諸科学の研究とどのように接合しうるのであるか。教育哲学における教育の分配的正義論としては、一方で「自己責任」論には抗しつつも、同時に「責任」をいかに語るかを考慮する必要がある。子どもの教育達成が社会階層の影響によるものであっても、同時に「親の選好」を尊重すべきだという議論もできる。アンダーソンは、親の選好の多様性、発達という内在的価値を肯定的に論じつつ、同時に人種や社会階層等に基づく集団的な不平等には批判的である。このように、教育の分配的正義論は、単一の価値に基づくのではなく、複数の価値の衝突をいかに調停するのかを考察する必要がある。

## 【1B】「教育の生政治」班

近代福祉国家の成立以降、国家の国民になるということと、その人の生命が保障されるということは融合しており、公と私の境界線は曖昧となって、「社会的なもの」(経済的な有用性によって人々を分類・評価する)が台頭してきた。それを支えているのは、個々の生命を効率よくコントロールすることに目を向ける「生かす権力」、すなわち生権力である。とりわけ日本は、家族、学校、企業社会のトライアングルによって、福祉国家の危機後も、学校を卒業して就職することが成人期へのメルクマールとして機能し、卒業=就職=親からの自立=大人という図式を維持してきた(小玉 2016)。

生権力を術語として用いたフォーコーによれば、統治機構は規律訓練型権力とともに働くことで、望ましい生のあり方を保障する。だが同時に生権力は、そこから逸脱する人々の振る舞いを限なく照らし出し管理する生政治を可能にした。生政治の統治は、人々の生を調整し、衛生的な福祉を充実させ、清潔で安全な社会をつくり上げる「つましい統治」である。正常/異常の規範となる「人間なるもの(例えば、理性的・自律的な主体)」を基準として、そこから逸脱する者を包摂する技術を生み出していく。それは善意をもって「狂人」を解放し、自由にするという言説のもと、個々人を分類・可視化して位置づけ、正当に監視する(マージナルなものを「人間」にする)技術である。正常/異常の分割や包摂/排除の枠組は、その「正統さ」によって統治実践を駆動するとともに、維持・強化される。

以上を踏まえて、「教育の生政治」班では、教育は人間に属するがいまだ人間でないものを、善意をもって人間にしようとする限りにおいて、生権力と相性よく結びつく点に注目した。教育が生権力と結びつくのは、生権力の場合、それまでの権力と異なって、抑圧された主体を解放することによって既存の権力に抵抗するという図式が成り立たないからである。生権力は、まさに近代教育学が目指してきた自律的な主体と密接に絡みながら働いてきた。抑圧された存在を主

体として立ち上げ解放するという啓蒙主義思想の目論見は、そこで措定される「主体」が生権力の保障するそれと同じである限り、生権力の包摂／排除の枠組を維持・強化してしまう。このように教育が生権力と相性よく結びつくのであれば、その生権力を批判的に捉え返す教育のあり方はどのように描くことができるのか。これが「教育の生政治」班のプロジェクトであった。

また、生権力と(広い意味での)教育が結びつく場合は学校教育だけでない。とりわけ生命科学の発展した現代において、その場は「子どもを生む」ことのうちに徴づけられる。アガンベンが論じるように、生権力は人間の生にゾーエーとビオスという分割線を引くことで、人間の生それ自体を政治化してしまう。国民国家は剥き出しの生である「生まれ」に「人権」を与えることで、新しく誕生した存在を国民として政治的連関のもとに組み入れるとともに、そこから零れ落ちる「難民」を生み出す。生殖医療は「生まれ」を人為的にコントロールすることで、剥き出しの生のうちに望ましい生とそうではない生との境界を画定することを可能にした。「障害」はその境界線のあいだを揺れ動く境界事例である。「障害」は、重度障害児の治療停止問題、人工妊娠中絶、出生前診断、遺伝子改良など、人間の剥き出しの生を生かすことと死なせることの政治をかたどっており、教育／福祉／医療等の人間に働きかける営為の境界画定にも関わっている。「教育の生政治」班ではこれらも視野に入れて教育と生政治の関係を捉えなおした。

プロジェクトの成果は以下の通りである。まず、室井麗子は「つましい統治」がどう語られ機能してきたのかを辿ることで、生政治と教育の結節点を検討した。そこではフーコーの生政治論が対象とする政治思想が概観され、フーコーが子どもの性をめぐる統治技法の変遷を棚上げにしたことに目を向けた。その上で、ドンズロの「社会的なもの」に関する分析を手がかりに、家庭を結節点として生政治と教育が結びつく様子を詳らかにした。虎岩朋加と平石晃樹は具体的な学校教室の実践を念頭に、「同」へと包摂する教育の営みそれ自体の内に統御不可能な変容可能性が孕まれていることを指摘した。幸福であること(happiness)を目指す教育には、統御することのできない偶発性(hap)が内包されていることをふまえたうえで、虎岩はアフェクト(触発)の役割に着目するジェンダー論を駆使して、生権力の働きの只中にそれに回収されない自己変容があることを論じた。平石はデリダの「歓待」をめぐる論を導きの糸として、歓待する主人であるために排除が不可避である一方で、他なるものを迎えるという歓待行為の遂行そのものに自己が変容される契機を含み込んでしまうことを指摘し、教室空間の読み直しを試みた。森岡次郎と杉田浩崇は、教育／福祉／医療等の人間に働きかける営為に焦点を絞り、出生をめぐる生権力に対する抵抗の可能性を探った。森岡はリベラル優生学における遺伝子改良をめぐるスローターダイクとハーバースの議論を整理したうえで、生に介入する科学技術に抵抗する可能性を、近代的な主体を要請するのとは異なった仕方で求めた。杉田は、重度障害児の治療停止において包摂／排除の基準となっている「利益」をinter-est(あいだにあるもの)として捉え返すことによって、子どもの最善の利益がそれを見出そうとする者と見出される者との隔たりながらも繋がる関係のうちに位置づけるべきだと論じた。

以上の研究成果は、第50回オーストラレーシア教育哲学会(50th Philosophy of Education Society of Australasia Hybrid Conference)(2022年12月8日、於:シドニー)において、How is the Critique of Bio-power in Education Possible?と題するパネル・ディスカッションとして発表することができた。

## 【2】「政治的人間形成」班

1つ目の主な成果は、政治理論と人間形成を語るための教育の言葉との、密接な関係の描出である。2つ目の成果は、政治学と教育学との距離、及びその距離を生じさせているものの検討である。人間形成と政治とを接続させる場合、後者が掲げる望ましさを実現することができる人間を育てるという語られ方がされる場合が多い。本研究課題はこれ以外での接続から教育の規範理論を語るための方策として、熟議民主主義論(鶴海)、ジャック・ランシエールの民主主義論(田中)、ケアする民主主義論(市川)、ウィリアム・コノリーの政治理論(岸本)、丸山真男の教育についての語り(関根)の検討を行った。具体的には、鶴海はジョン・デューイの成長概念と熟議民主主義との関連を、田中はランシエールの政治及び教育論の両方に存在する権威概念と教えの関連を、市川はケアに潜む規範性とケアする民主主義との関連を、岸本はコノリーの偶然性の概念と習慣形成との関連を、関根は、丸山が教育を政治と切り離そうとする語りの中に潜む要因を検討した。これらを通して、政治理論において人間形成はどのような位置を占めているのか、さらにはその理論からどのような形で相対的に自律しうるのかを探究した。

以上の成果については、日本教育学会第81回大会(2022年)ラウンドテーブル18「教育と政治の間を再考する」、教育哲学会第65回大会(2022年)ラウンドテーブル1「『政治的なもの』と『教育的なもの』の交差 政治思想における教育／人間形成論の含意を再考する」において報告した。

なお、各班の研究成果を相互に往還させることについては課題として残されているが、その点も含めた本研究成果を『規範的教育学の再構築(仮題)』として2023年度中に刊行を目指す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 高宮正貴、橋本憲幸、児島博紀	4. 巻 125
2. 論文標題 教育における分配的正義論の可能性(3)指標と差異	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 94-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 室井麗子	4. 巻 125
2. 論文標題 「市民社会」という感情の共同体とルソーの異論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Reiko Muroi	4. 巻 7
2. 論文標題 Rousseau's Dissent from "Civil Society" as Community of Emotion	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 E-Journal of Philosophy of Education: International Yearbook of the Philosophy of Education Society of Japan	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鵜海未祐子	4. 巻 33
2. 論文標題 民主教育論と熟議民主主義論の意義 エイミー・ガットマン（Amy Gutmann）による教育の政治理論を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アメリカ教育研究	6. 最初と最後の頁 14-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鵜海未祐子	4. 巻 4
2. 論文標題 性教育政策をめぐる民主教育論の再検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 駿河台大学教育研究	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15004/00002393	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 児島博紀	4. 巻 89(1)
2. 論文標題 「書評 高宮正貴著『J. S. ミルの教育思想 自由と平等はいかに両立するのか』」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 109-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石晃樹	4. 巻 31
2. 論文標題 「フーコーの自己形成論 「はじまり」の問題を中心に」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 29-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 125
2. 論文標題 図書紹介 ジェーン・R・マーティン著、生田久美子監訳、尾崎博美・犬塚典子・畠山大・八木美保子・今井卓実訳『学校は私たちの「良い生活(グッドライフ)」だった：アメリカ教育史の忘れもの』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 135-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 30
2. 論文標題 思想史は私たちに何を教えるか??ククリック『アメリカ哲学史』翻訳の経験から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 185-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古田 雄一、間篠 剛留、石嶺 ちづる、岸本 智典、福野 裕美、原田 早春	4. 巻 80
2. 論文標題 テクノロジーの進歩と社会的分断の時代におけるデモクラシーと教育 - 米国の経験とこれから -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育学会大会研究発表要項	6. 最初と最後の頁 87-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11555/taikaip.80.0_87	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 758
2. 論文標題 「個性」を飼いならす? 道徳教育と「個性」の困難な関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 道徳教育	6. 最初と最後の頁 80-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高宮 正貴、橋本 憲幸、児島 博紀、生澤 繁樹	4. 巻 123
2. 論文標題 教育における分配的正義論の可能性(2)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 101-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石晃樹	4. 巻 13
2. 論文標題 The Revival of Moral Education in Post-War Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 200-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 5(2)
2. 論文標題 子どもの道徳性はどこからくるのか : 19世紀米国における超自然主義的有機体論を再考する (特集 アメリカ哲学史をレポートする)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フィルカル	6. 最初と最後の頁 154-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一、関根宏朗、綾井桜子、岸本 智典	4. 巻 29
2. 論文標題 教育思想史 の誕生 (4) フランスとアメリカにおける教育学的カノンの形成 (コロキウム6)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 148-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20552/hets.29.0_148	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 29
2. 論文標題 書評 田中智志編著『教育哲学のデューイ : 連関する二つの経験』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 218-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 122
2. 論文標題 書評 山本孝司著『アメリカ進歩主義教育の源流：ブロンソン・オルコット思想研究』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 746
2. 論文標題 「道徳教育における「性」をめぐる問題への視点 ススパウムの議論から考える」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 道徳教育	6. 最初と最後の頁 84-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hirotaka Sugita	4. 巻 ?
2. 論文標題 Re-envisioning personhood from the perspective of Japanese philosophy: Watsuji Tetsuro's Aidagara-based ethics	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Educational Philosophy and Theory	6. 最初と最後の頁 ?
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00131857.2021.1897571	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Morimichi Kato , Naoko Saito , Ryohei Matsushita , Masamichi Ueno , Shigeki Izawa , Yasushi Maruyama , Hirotaka Sugita , Fumio Ono , Reiko Muroi ,Yasuko Miyazaki , Jun Yamana , Michael A. Peters & Marek Tesar	4. 巻 ?
2. 論文標題 Philosophy of Education in a New Key: Voices from Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Educational Philosophy and Theory	6. 最初と最後の頁 ?
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00131857.2020.1802819	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 高宮 正貴、児島 博紀、橋本 憲幸、平井 悠介、玉手 慎太郎	4. 巻 121
2. 論文標題 研究状況報告 教育における分配的正義論の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 147-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高宮正貴、橋本憲幸、児島博紀、生澤繁樹
2. 発表標題 教育における分配的正義論の可能性（3） 指標と差異
3. 学会等名 教育哲学会第64回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平石晃樹
2. 発表標題 「よく被らなくてはならない」 『教育学のパトス論的転回』 から出発して
3. 学会等名 日本教育学会近畿地区 オンライン企画「『教育学のパトス論的転回』を読む」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平石晃樹
2. 発表標題 BildなきBildung、あるいは「生き様」のエートス フーコーの自己形成論をめぐって
3. 学会等名 教育思想史学会第31回大会 フォーラム「近代教育批判以後の主体性 後期フーコーにおける「プラトニズムのパラドックス」を中心に」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸本智典
2. 発表標題 アメリカ哲学史にとっての心理学 「実験心理学」の生成とそれへの批判(シンポジウム「世紀転換期アメリカ哲学と心理学 ジェイムズ、デューイからパークへ」)
3. 学会等名 東京大学共生のための国際哲学研究センター(UTCP)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉田浩崇
2. 発表標題 データの確率化によって偶然は飼いならせるか 「教育の存在論的な弱さ」をめぐる一試論として
3. 学会等名 教育哲学会第64回大会課題研究「データ駆動型社会」における教育哲学の課題 これからの教育にとって「データ」「情報」「知識」はどのような意味をもつのか (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hirotaka Sugita
2. 発表標題 Dynamism of the Disclosure of the World and Transformation of the Self: From the Perspective of Japanese Philosophy
3. 学会等名 Asian Link of Philosophy of Education, Winter 2021 Seminar (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉田浩崇
2. 発表標題 生政治における重度障害児の代理表象をめぐる一考察 三人称あるいは非人称の哲学を手がかりに
3. 学会等名 教育哲学会第63回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉田浩崇
2. 発表標題 条件法を用いたかたりに関する教育哲学的考察
3. 学会等名 中国四国教育学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高宮正貴、橋本憲幸、児島博紀、生澤繁樹
2. 発表標題 教育における分配的正義論の可能性(2)
3. 学会等名 教育哲学会第63回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 A. セン、J. ミュールパウアー、R. カンブール、K. ハート、B. ウィリアムズ(著)、G. ホーソン (編)、玉手慎太郎、児島博紀(訳)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 236
3. 書名 『生活の良さをどう捉えるか 生活水準をめぐる経済学と哲学の対話』	

1. 著者名 日本デューイ学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 330
3. 書名 民主主義と教育の再創造: デューイ研究の未来へ	

1. 著者名 竹尾 和子, 井藤 元	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 290
3. 書名 ワークで学ぶ発達と教育の心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	虎岩 朋加  (Toraiwa Tomoka)  (00566721)	愛知東邦大学・教育学部・准教授   (33937)	
研究分担者	平石 晃樹  (Hiraishi Kouki)  (00786626)	金沢大学・学校教育系・准教授   (13301)	
研究分担者	森岡 次郎  (Morioka Jiro)  (10452385)	大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科・准教授   (24405)	
研究分担者	杉田 浩崇  (Sugita Hirotaka)  (10633935)	広島大学・人間社会科学研究所(教)・准教授   (15401)	
研究分担者	鷗海 未祐子  (Ukai Miyuko)  (30802235)	駿河台大学・スポーツ科学部・講師   (32411)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	室井 麗子  (Muroi Reiko)  (40552857)	岩手大学・教育学部・准教授    (11201)	
研究分担者	関根 宏朗  (Sekine Hiroaki)  (50624384)	明治大学・文学部・専任准教授    (32682)	
研究分担者	岸本 智典  (Kishimoto Tomonori)  (50757713)	昭和音楽大学・音楽学部・講師    (32716)	
研究分担者	橋本 憲幸  (Hashimoto Noriyuki)  (50759016)	山梨県立大学・国際政策学部・准教授    (23503)	
研究分担者	児島 博紀  (Kojima Hironori)  (50821542)	富山大学・学術研究部教育学系・講師    (13201)	
研究分担者	田中 智輝  (Tanaka Tomoki)  (60780046)	山口大学・教育学部・講師    (15501)	
研究分担者	生澤 繁樹  (Izawa Shigeki)  (70460623)	名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授    (13901)	
研究分担者	市川 秀之  (Ichikawa Hideyuki)  (70733228)	千葉大学・教育学部・准教授    (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------